掌席集撰来歌解　二

巻　春

草庵和歌集蒙求諺解巻第四

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

夏

更衣

更衣は四月朔日也。昔は十月朔日ばかりあり。源氏物語に見えたり。順徳院御集冬の部に人々に衣ぬぎかへさせたる歌あり。形式はかはれども猶冬の衣を脱ぎかへる事なり。今朝は冬の衣也。されども夏衣といへば四月の事ばかりよまるゝ。かゝれば事二度あり。和歌は始めばかりを用ゐる例也。公事根元云。更衣一日前に衣ぐるまれば宮中ならびに諸家掃部寮あらためむ。御殿の御帳のかたびら。形もてすゝしに胡粉にて絵をかく。壁代みなてうにぬぐ。

浄服い浄ら紙ーぽぐすしれあるのひくくよりはくうどう法。内蔵寮
ようなる。女房のきんあいさのきんあ其衣ぐれひくかーきねけとしし。
裳い上鶴浄裳。小上鶴。浄色常乃如ース云十月一日い先浄衣
くあり掃部寮。夏の浄装束と撤ーて冬のよあくくちうくス云云
あ其ちる袖れまるもし浄ーかーじるれて仏をこれう法どハ
袖の別。神ー別ーく也。衣の衣をきて。其の衣ー別ーく也　白あの袖
まるくさ日紙迄ちんくしもびれのうーなる　化京安万三　玉旅ふあれのくそ
なくあり白あの袖の別とかくみーてあつれくゆーゆうするかも
万十三　白あれ神の別いれーくれどうい紙きてゆるーゆるかも　万十三　仏を花
ーきあびいぱーくもあーじとそあーゆーぱーくきくちくーゆ也なれて
ぱ花ー別て也ス衣ーうれくース云詞もあれい縁也。深るも衣の縁也
ちうあれい行きくかーる花法れ神をかくみーとあふ井ちいん
桜　文ー衣いちくーゆ法てきんれのちうんはの形えくよ　友則古春上　花の

ちうて間もなく衣をうあまびぱ花のちうんはの形えくよーゆ
どーぞ形えんふーしるまもなれ物をくきくよ也
浄ーあ大納言家月次三首ー月ーんを
ゆくまれくうみを思ーい花染のちうをへどーてうへまくもおし
まんの友則所。本方也。花染乃衣を。比もとかけくよあう。菊浄
乃大和ーたのくぬくーー衣こうもつ　貴古　ス四　うへまく
を行ーいかーんも行ーさ也。衣を花ー染て。其れ形えくーせんとちーに。
行もへどーてうあうたー行ーさ也

金蓮寺ふくー所ーよ文作ーー　朝の文衣

金蓮寺。四条道場也。縁起云。依ー叡願。應長元年辛未八
月廿七日建立。號錦綾山興國金蓮寺。開祖。浄阿上人也　祇陀
林寺浄阿弥陀仏也

ちーに作ーれまーにをくーくーー花のう紙けさ立うーる神にうのさん

ようけんぷうやさわぐなり。春月は出さうで。まことをうつくしかりけり。
月まで殘る餘花也　紙（古文）まことの花を深く衣をこの白衣ふうくてぬぎ
おくもどせんもうけまじぶうやさわぐけさうハまことをうれて
咲花の香あれハ白衣ふうたりし深てきうくれとちうる也

更衣

ぬぎうるたぐうや神ふうのまん花のうつしせミはちろも
はは神ハ人ハ白うくてきう。蟬の羽衣の神也。蟬の羽衣ハ花の香ハ
夢さい始。まの花ようたうさうる香ハ非。ぬぎうつる何ぞ。羽衣ハ
蟬の羽衣ようたうくる香なるゆうすれ也。花の香ハうとれとい
ひて。蟬の羽のうすき衣の詞ふも成也。羽ハ衣紙ぬぎうる
間ハ也。其ハ何ハ也

都鄙文衣

都ハみやこ。鄙ハいなか也。ぬ中也
新あもたちハふりの日ハ陸奥ハ出うり井ハ先を出ひて
ハうりハ。源順の和名云。繰。毛詩注云。繅（新式反又音消。和名。加止利）繰也。釋
名曰。繰（音藻）其絲細緻。數兼於繒也（云云）落紀きぬ也（例云）
うるハうりの衣ハ白字うさねてもたうすれ神うる（六条四条彩千文）ハうか
とあハ。ハうるれ乙女也。香取浦下總國。名寄。常陸國。まう神ども。
みちのくにハも青とうとうう　繅（ぶ）ふるふるゆくとうたくの
ハうりと女のゆいいとく（万十四　京欽）ハうと衣ぐをてハうりの衣にうり
あれハ陸奥のハうりと女也。香取の名ハ意ぐくハうをハきうを
こて立ううめとぐいゆる也

民部卿家歌合

餘花

此方新撰古今ハ入ハ。中納言為家ぐぐそ歌
よみ侍るけるハ。餘花といふ事を有

とうれぬやとしいまてとしのあこ山桜まこ　ゆきまとをくみしこすえを
春の間をつしなくしらるさるらく　山桜もいかに夏ゆかれいかにや
咲めるあこ　見たらいてるんとも也

餘花を

しらくもとそれ名ゆこそたてまこまて桜さうい山まこて極めうらうら
おぐなうこと名ふこてゆこれ桜花年ままれなる人も行きうう
仲多物語　山谷の左　蛾花詩よ　蛾黄開晩落應遲　とあるなくく遅桜と
つして咲事のをそくいちる事ふそうくへさ程よう秋かどの
しらくも変べき事なる紙数事いこれも常れ花く同し程よそや
くてさうの程れなことをとくいぞうそ桜とて入咲ゆ八うのうう
ふくくちる事いそそのくゆとれくしむ也古人哀傷よされのかき
れかいまくら来と白川のあくうにをそうくう夜よある事性は常
らのなくぐ歳てで滝つ白川いは老ら代までのくにてそあるとくれ

此句法をもらいてくゆるなるへし

和奇所月次之首　庭の新樹

庭れ面い花のうげてそ咲くるこも月ふくくまで志ぎくこもい
花の法のちげうるーぐそれも咲ゆるれいいらうて夜事五の
ゆうの素れ法よゆくうる也ぞれども咲ゆ花なまた是那ゆしゆ八月れ
りくゆまでいちけくぐてゆれうーぐゆ也　松棚　清陰　堪愛還
堪根遮那　斜陽　凝月明　陳元信

門子た入道大納言家旬十首　外花

ゆれ花のさけるうさ称い白ゆるれとち緑をけさてゆるゆくそうる
風ゆるれゆもけーどゆうちけば岩ゆるれて咲花くぞみる冬事ほど
こいゆうてぞこたふうゆくしつて事もゆくぞこもゆうる紙ゆ
とけーどくゆうるふぐ行いゆ事奇れくいて　垣れいうれるうて
外いゆうゆいゆ雪の雨をまれてゆうるゆくゆくゆ花をゆうくゆくゆ

よもつこ

社。卯花

卯の花は家をめしよりは社にあるそうら人の袖うかをそへ
榊葉の香紙かくりてとめくれば八十氏人ぞまつねをするとける　拾遺 神楽
えつてくまの河の白妙の神うちのぐぞあやまつれる　友則古 牧下
を神まつりは阿波の卯花を白妙の神にぞ。氏人の袖は白妙
そてとあり八十うち数多くあり出てうり

清子内大臣言家

さつだは月うとまがふ卯花と家をとてみぐく玉川のさと
ちぐでぬまさかりでさくせぬきぐだと月し家のをうねさく。
月かしは卯ぐはぬ卯花はそとてぐだれそくるゆいはくゆくてはかと
えゆうせぬいんぐねるしいぬ玉川とうけそいうり 卯花の家うり家
をけうとて月とみがきるぬ玉川の里　為教 玉葉　とい合とへ

家卯花

蓋は家の勝月とも卯花のかきひよ移りかけぞさやをき
玄も月ろ世わろとゆうふ卯花の之ゆ映てさあたうあり也

清子内入道大納言家旬十首　牡丹

家ときうあふそい家れうとうぞと人の花ようる世よ
何とかんぞやもぞうを藤ようぞ人の公の花ぬるけ
ふり古 何ぞ多うぐやさあぐし人れ公の花ぬそおぐく
ぞ紅せかるふ牡丹の咲てたふ人の公の花ぬおをうも花
を源くぞとうを公ゆくぬまで花義ふかう東と成ぬうり 洛陽人
謂牡丹為花成都人謂海棠為花尊貴之也 鶴林玉露 遂使
王公與鄉士遊花冠蓋日相望車軌輩貴公主香
袗細馬豪家郎 牡丹芳白氏文集四 花開花落二十日一城之人皆若狂 花時比屋事豪奢買栽池

館恐無地看到子孫能幾家云云羅鄴牡丹詩三體詩中又
委事物紀原東花至小能成實桑葉雖柔解吐絲堪笑
牡丹如許大不成一事又空枝王晩村詩格一引合璧〇歐陽脩風
土記洛陽俗花を好む春後の事とのせり事長書之

　　蓼

　　松吟百首より

なふとたづかくそこうんそのうしたきこもあつしのうさこあわを
何とあぐいかとてたもさくふかあくあうたらんぐいくよをと
つよかうの名も唯乃字此名よかちよも　ちとあのあもあぐ〇
乃ちもまるれ世の中にあんちぎりい清水拾遺抄　今いんぐ色り
出てやうこみまこうれ身をちくわくはをもも文四位注尹　九まに寄
つぐそば梅花あぐばくうも白いこどや松雅　うきていぐけて
と云ものあり上代のいをとれあをけるふけてぐこと名もあり。
懸の字れ名ぐうをうぐていい上代とうけその名よて蓼いぐんざ〜

なくしてあり中ゆ縁乃詞也　題てのあるけくよ事もあり奇乃名は
何とそげくふかくそい名乃ぐでうけくこ上代よい又と名百けおざしれ
あなたとも也祭とのの儀式ぐくこう事と節くあるくしうの
くみぐうをこぐいつとも其時をけても〜う。往昔當時乃字
なり。蓼と。蓼百しかけこう　かとの名乃物ん付乃女事よい
入て行くきうよ人王名　紀乃名八十氏人のあぐ〜かけてそ行む
あついて名紙返し　ゆくてすれ乃事をもいつるあぐくけあついて
名ほ名をれしてせ〜松友

　　御子左入道大納言家旬十首　　蓼

まあ秋れ名く地人文れこやあ人もれあぐあひをうぐんこ人か
まの文い東文也春宮こもうけと秋の文い中宮也　五月雨
春乃文人くう何い時名をや常しやん大春日研花後文　蓼事秋の文人か
事をくてのこふけこうかもの川水上生二ね　八種くも昔乃道こ吟

ふるしきれ宮人秋の女人 拾玉下 名にはかへば名に負ふ也。かみ紙衾（ふすま）
してかる也。名のみ花なれどもかへりしは助字也 神無月のなかにかるを
けるなかぬくの名のみ神にも衣のふるなるなごそあれ 文屋ありすゑ 古雑下 よるは宮人
秋の女人なしは何節れちゞいろ夜の袂をかさすゆきいでゝ
も夏の袂をかさね也。公事根元云、着。是れをはぎかへしたるに。
人く蓉槿の藻をかくる也 云云

夏祭に

榊とる此めもまだぬ神山の山ほとゝきすれいやしかるなん
榊とる卯月になれハ神山の楢のはがしいまもとなりし 拾玉 かと
家に榊とるまで神事に用る也。神山は賀茂の山也。榊取ハ卯月の事
なれバ郭公も夏をとるそぐかくもなけ也。すられんハおちのなんめく
なけとはふ後也。巻下 加茂社六百番にも

等持院贈左大臣家三首に 曉郭公

時鳥いつきてなかし神まつり祢宜をうれしくまちかねやらん
上句ハ調をこしらへまうけていへり。時鳥ハいつまでかまたれ給ふ、神也
されども祢宜ハ仏もすまて一四に待つゝ也。下句ハいつよりもねぎ
ふかくさりはまれて感情ありく面白きゆへ詠む。祢宜とハ忩祈事
のかしに思ひて侍ハいつの祢宜の時よりも聞神なる事なれば。それ
をなしいゝにして待事ぞいはんの祢宜にもまづ時神なる事には
かねてよりいぐれやくかけしも待也。時鳥もれねど待とかけ
まどもよろこへ聞をもと後しけれ 夫木 今撰集 引合すべし

住吉社歌合に

歌合の事ハ八雲抄に申く出たり

志のびねもまだつきせぬ時鳥いつの人まよ紙にまかうん
くらしあくしみぬれ梅を桜花いはれ人まし待いあらん 夏之 古今集上 人まる
ほとの夏き間なりと思しひてなりとも思いてさへ花く

ゆゑにはいつれ人こと我待て啼んとする事ぞと也ぞやくたしなめしかし
待られぬる心よりとよめり思ふ音は人にかくし思ひて啼なるよし也。
人のたれ聞ぬすらんとよめり

弾正尹親王家五十首よ　郭公

すまゐそぞはしとはいへ河鳥待をおもしふ年ふれへぬれて
あはぬ振らられそかたれそこぞ忘とはなき年のへめきは　右雑上
なきは海也。年と待をすむふて聞しも又人に語ことれはずんぢ
はつしき物なれし也

聖護院二品親王家五十首　待時鳥を

こしをともしらぬ名にたゞ聞るさのとなく猿をすみに思ひつゝん
思ふるといふりわりば猶久しく待もならずさゆゑに心ずぞ
はしとなき事ども思ふよぬしもせぬ名の立事はなけれはし
きしめ志のふといふやうにして忍の方みよせてしきゐとよめり。何

はかりそ也
忍ぶしんを

待まいてくるきらよしいれ聞まきぬるかりは猿んぞもなし
幸夢の中よ逢みんるまでも聞のしはく果やらよもいはれん本・候　後今不知 古宗一
猿日待まいて。そうしも果あれは今ん猿やせ侮とらへども。ぞきぬ
またとかく猿んせうもなくて待るし也
契りそくて猿すれは中々まことなりけれ郭公かな
いつの何時なくべきしく契りをききとぞ其日ばかり待べきしば。りつくら
ぎしれば。何時啼べき中なんためゆへ毎日まちぬよれたなれ也かくは。
中に待そ也。郭すての声を聞。鶏の声の声よ委　聞ときまぬ宵乃
あるかりはわるる夜も一夜わしまぬものを　続因 後拾遺　引合よくし

等持院贈左大臣家月次三首　夜聞時鳥

ほようともふれあるるやおしむせん夜ふくといでぬ郭公かな

なぐさむはいつも月ぞかはらぬ山のあなたまでも携へてぞ出る也　古雑上　後拾遺
ゆかむ後はかならずば花月の出るばかりぞしと思ひて月を待つ月
は夜ごとにおなじことなり行方はまだいでもこれをたとへば山のあなたの
人は月よりも郭公をなほ戀しむゆへ夜ごとにも行方は山を出る
からんとしと也

後の岩屋の蔵の寛白家にて　郭公未遍

いはくかならずしもいかんほとゝぎす月と里はひとつも夜は更
里つゞき郭公をはれども行月は入さの山を待ちかねる　未稿　幸
聲に里つゞきとふ詞より里まくといふ村雨は雨をまけて月の
ふる夜雨のあれはぞの夜によりて月は見えも照るとも雨で降る夜雨の宵
で里をまく影も見ざかれば其月のてらに雨ましは鳴でゆるさぬ雨まは
まねきさる也今はほとゝぎす我方ましたなるすこしありなん宵鳴
雨なる夜雨の名残ぞ未遍ましけつり　例　ふえてよ里まく月の光に

待夜をことふよとの村雨　寂蓮　古冬
前三河守高宗身まかりける時人にかはりてよみ侍りける

待郭公

作者郭觀云平ノ高宗ハ無ㇾ傳。新千載。新拾遺ノ作者
かくいひりあたとえへて世は何のいたをまんりつまとかりあらん
あまえん世　涅槃經ニ云ㇾ雪山ニ有ㇾ鳥。雪中ニ堀ㇾ穴。夜ハ入ㇾ穴ニ。此
鳥裸ニシテ無ㇾ毛翼。若シ勝ㇾ餘鳥。故ニ名ㇾ寒苦鳥ト。此ノ鳥入ㇾ穴ニ終ㇾ夜
憂ㇾ寒ヲ苦ム。其ノ鳴音。寒苦責ㇾ我ヲ。夜明ナバ造ㇾ巢ヲ。夜明ケ暖ナルニ至ル。其
鳴音。今日不ㇾ知ㇾ死ヲ。明日不ㇾ知ㇾ死ヲ。何ノ故ニ造作ㇾ巢。安穩無常ノ
身ヲ云　例　あさましく寒のさもいふは鳥の聲ならねども人の身の上に
拾　後京極　摂政　あかしけるまのこしかねの鐘の音にもやくぞうけの声
ひとつもけふはやとさつる世の哀をしるも教ましてぞまじりて出るなれ
二条院御時吹拾意二　かくてはかくれかくしてこれなきかくれがのことはりもあはれは

えらふのいそねし波こそあらまし袖を　二万　かくいりのへりてくみえゆく
世すれしや海しくも渉る月に　拾冬　最承元之　うくはりのむしとてよけ紙
いてろに移そ明らん人さえそこた　上　古秋　世の無常を隠してかくれ
といへる心よりまふの死をいうそそのかれもわとらぬ世すれ。
いろの何時を待て呼人さと思いてはまらぞおもあらぬ世に
きたれ時もやくるけ也。まての何時へ人まさえとりにあり。
まつハ時なるかまへ也

等持院綉左大臣家五首　　侍郭公

いまきさも名にさりゆへき時鳥呼いもとハすなれのみん
時ねのおも立しと云ハ一声もなれ人そ只それかまつハ時
うりまかう待つハおもぬしき世のう云さかれてかのこ紙いつさ
まはえさいれしと云ひてあかぬ侍なりぞれども呼ぶ
まけそもやかぬハつきなきといいてかの五事おれハ同じくいい

一向うり呼てなくまるてかしく待兼てるなりとり

三宝院僧正坊　　郭公を

一声に明ぬなまいとままさくて待夜かくきよれたに
夜のよ先ゆすかくもれい郭公呼一声よ行くるよのくめ　古夜　侍夜
のかさなるのほく。まさきされば呼一声よ明るといふ事も是
らは侍夜飾て呼一声よあるといふ事みも是る人さいなく
みあけらしや侍るてよめる也

民部卿家　　勘題百首　　山家時鳥

これ里に移つまあるハ郭公なれてや山のねくをいのん
此里は山中の里也。此山家まさ人はまえあれハ近くめて奥山
をもはまをなるにして出るゆへ此里みもまさつまなれ為
なりし也

御子左大納言家句十首　　人傳郭公

濱鳥まりのよめるよしあはれ袖をかくて我ハいつはれなる孫なるらん
それハ孫のあらて一夜も孫の事ハわすれねども秋のもなくらね
物をさまらく人のすてるはいつのまにゆてるらんとてうらしくれ
まよ御よ門をハされかどめる夜もなく孫よかゝるゝ事なしとかなむ
こゝなり

孫の時鳥

ほとゝぎすそれかくたどらぬ思ひ孫ハとくしきをも打しむ孫を志して
それの乃みもそれはあれらく思ふべかりけれ我がの思ひねハ晴らく
小まえれかくの志れてる也。孫をぞかるなけりしと也。かぎるなけ
めるなあり

おぞましん孫

郭公わがたゝめともをひねをきしたといふぞ人よかくて孫
我月ほひころ孫くにするゆへ人よさそ。我孫よとてかし見る孫の君か

是は然やとくぞ人々はかゝるべき事にあらねども也。新後拾遺夜西行
法師「呼子鳥ひとつ我ハ一声ハきゝつといふぞ人よかくてん下句同じ
様あれども尾行ハ上の句にてそしらずや孫ハかゝりけとし。一首の
心うつくしく我がるかな様の下句の同しき事ども古人みてゆかし
他人の言ふなくともハ聞も及ますく覚えてもするど芳りなき孫ぞ
難くするよ非。甚数おく詞と「向をれくねちるハしとよ所の
数さへんゆる秋のよの月 後拾遺 古秋上「池水のよるハいでかそよ黒の数
さへる秋のよの月 忠岑 集「おちたぎつ滝の白玉ひろひをきてえぬ世
のうき時の涙にぞかる 在原行平 古雑下「わくらはにとふ人あらばすまのうらに[illegible]てよの
うき時の涙ぞかる 後拾遺 拾秋中「石ばしる水の白浪立かへりかくこそはみめ
みあかずも有かれ 古今 四「我宿に咲ふし日より桜花くくてそれにあ
あかずもかりなき 元真「忍しきれたなの袖といきするども世の御みも
帰へきや 伊勢物 集 拾撰恋二「忍て志るてよ事ハまぐさあれを世の御みも

衣かへさうれ　忠岑 拾遺云「秋萩よりもしれをきれハ足引の山下とよみ衣こそ明　是慢 風躰
なりけり　後撰云 古秋上「風をまちてこそしれおもふ秋のはは山下とよみこ衣そ明すなる
ひまもなく蒼苔さへやむすふらん松浦の潟といつるあま人　釈阿云 右首「すそてに
見てしもかくさもまうたらぬ本緒のくるをいなるあま人　壬二「何となく流
落つる月もさき中なきとよみ晩の空　三 拾玉「夜のほかに雲なからう
あけかたやゆくへ知らぬの晩れ弥々　四 同「あさかりや打ちとふくも夏れとは
ゆくへしらぬの晩れはあり　中 拾長「三輪山をしかくしもかくれうきえハ
またあかずやちりなん　基之古 今古「吉野山そのえ雲のあはれハ今は是にはなり
あかやちりなん　中勢 拾長「吹きわたる日もなくわかるれは人とくそぞくへにまこふへき
後撰云 古恋一「忘るれば時まあけきにゆきまの間ぞ人ととぞ人にまたれる我　あかつくく 拾恋三
思へともあやしきのといへるハ夜の錦のかひなきそすれ　後撰云 古恋三「君
見ずれハ取り見えのみあやでもしまきの山のきたりとれ　杜子同秋上家 後撰新拾冬
又三ゆまりも下向しを待も有「万代の数ともぞむすまみるゝせ川とれのる

庭の菊れさきのみ　古今集「万代の秋まつて絶へんハ菊かせ川とれのる庭の菊
の下かみ女　後撰云「打寄れむとあちこちハみるおせ川よそれのるの庭の菊れの下水
拾長中　此外不可勝計　絶句　此詩無名氏 見三才調集　春光冉冉帰何処。更向
樽前把一盃。尽日問花花不語。為誰零落為誰開。注云
厳惲詩。酒尽花残花不語。為誰零落為誰開。詩格 十七巻　周子
厚芙蓉驛詩曰。鳳凰山下芙蓉驛。零落残碑半蝕苔。
姜白石嘲上元禁鑼詩曰。市楼歌鼓太喧嘩。零落残碑
半蝕苔。稀には同じ句ある詩格に出
弘親王家三そそよ　郭公
里ごとに名をしまけ稀ハ時鳥すけにはまさる名をやちるらん
今も「なかなか月をとゞめしハかへりみむを君よそくへて絶ゆる　いとこのま つゆぞさ 古別
身をしまくかまのあくさんなをすでみ夢にかりもそぞあまよそくへきる
太今かなのけは 古別「身をうけてあまなくぞおも不ゆる人ハくりとらいうの物

（後人不知姓名）等思兩人忘いけるをもとぶらはんとて来れるもの也よふてくんみて
くるふ我身也（右文殊詞也）何方可化身千億一樹梅花一放翁陸務
観善導大師般舟三昧經曰。證得菩提無上果分身百
億度衆生観經云。分身無量壽佛。分身観世音大勢至
云云 地藏本願經。分身集會品云我所分身遍滿百千
万億恒河沙世界毎一世界化百千万億身毎一身度百
千万億人令歸敬三宝永離生死至涅槃樂此外多し。
元の広い郭公の里ぞふる身を変ず（後方一同）ふくかなべき
ふる里の恨ことあるはどきるれども身を分てをるゆへなり
一方まちてもまた一方にまぐたるゆへ里いつまるもとしてそ名残をる
して宵人さとをもてこれも神郭公ほと行也
山里ふく郭公をきてて
つもてをくるいでや時鳥ゆげろこをを人とゆくこん

こゆかくなくきたるよ刺してなんぢらも空て里へ出べきまでつまる
出て四うはべまぐ河まぐたをまれいぐ手ばくえさしてのこうんケ也
待神多しもしも者元の方場まるる花 別のくぐ吟ろちかふ
郭公深ふ紙いぐるけまれ神多ノ（坂上是則拾遺）引合をゆるこ
民部卿家ふく　夕郭公
村もれ空ふなくるり特鳥ふれ夕くやたのひこうこん
神ふ多れいを思いてひろ紙ふとてびタこ時んそハまろんタ仏も。
ち紙もふくを思ぶゆくもの内ふくるくく吟んふ也
義原基行よ四位ノ三前　荻時鳥
ふる里ハ夏のまうこををあんまぐ上ふ荻れと思ほくきん
夏の花ハ移くあう同也深夜ふれいづれ里とゆくこうこ落
夏ハ松ハ上ふ下ぐ花ぐもふれのをいぐ深荻の夏を
まこうぐふこうこうこうぐ也

前藤大納言家月次三首より　郭公

時鳥なくもまくべき紙いろ一ト声さへ聞ざらんつて

君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝか寝てか覚てか

伊勢物語　返し　かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとはこよひ定めよ。

まづ一声ハ夢の中なりしか。今一声鳴なば夢現をわかんべき為て

とくに二声めはなくよふやハ鳴しゆへ是も同じ夢にや現とも

これぞちかふりなしぬるとまで言出ありけくの疑ひをも云たてる心

とくし

民部卿家五首　夜郭公

夜更てぞしのびかねける時鳥こゑをしるべに猶やまたまし

これかしこ八郭公の郭公なりと云ハなれなく鳴也と云

八時鳥の五府より神主のかはにくゞれよそれて鳴所

なる里にて鳴ハ里人の待ところそ神ありなん時には前よ三声

鳴ぬれハ里まてハ神主なりしかれて鳴べきに夜更てぞ

まかく鳴よきハ三声とて鳴ければ里までもかのくに鳴ぞ待

ぐるれ神主といへり是は里にて鳴所のみ也。又一説に山中に

て鳴しと也。山中ハ郭公の五府までに人もなき所なれば世にへき

のもなきをも山中ながらも神主なれとこそ夜の更ての紙侍く

かのくに鳴し也

花山院入道中納言家五首より　暁郭公

いざさらばたゞかりそめの郭公れそ乃山ほとゝぎす

郭公の嘶かれなくきほゆく空にもなれのそらハ方もやし也

さく嘶ぬれ也。此嘶ハ人也。空の字。天をいふハ常の事也。時を

いふもありて方角といふもあり。されども方角といひて東西南北

をいふにつけて云方角まれもれし。何とやらんなく思案の

きはなきを方角がなれて俗に云方角也。此うたそこの所紙

いつはりの時分也「人しれず待れし物を五月雨のそらにかゝるかな
郭公かな　権大納言公基　續拾撰夏「ながめても鳴くなる大方のそらぞふ出し秋の
ゆふぐれ　西行法師　玄四「神鳴の声聞かすむ出がりつれそらかにするかな
雲乃名　拾遺　上　こゝろハ時鳥の鳴也。詩よ。清和ノ天。繁花三月ノ天
活汁　軽寒軽暖杏花ノ天　同　など皆時分といへる是に同し「雨乃
小なかし小暗乃名残ぐれ行そらもはし見えて別て　今昔拾穴「待わなん
そらもえらびなどそばをそての山の出し月殊ろくまた　源重之　拾玄二「山里乃名
をとろふか夕暮よ立なんなもなき名残して　名寄　巻　聞なて行そ
ことありしれぬ明ぐれはいづくれ名乃かゝる神なり　若葉　これハ方角
乃縁也。又虚空れ字乃名ハ常の事なれハ不及紀説　下　新又案ずるよ
あくれ虚の名宵。鳥の宮あらなも待ぞそのか空に云也
あまれにみとを時そやいづる時鳥あくほこゝまして急ぞさことげる
天の戸ハ天の事なる也「秋風よ哉をあたにあげてくるゝ名は天の

戸ほそさもやじ有なる　為家　新撰　古秋上「うきまん似思ひ物から天乃戸乃
明るはつゝき物とて有なる　後久我　拾玄　有れとあかつきに鳴く鳥あさる事ん。
行きれ間よ雲の声ゆる也　明るれ字をのぼるこゝ戸の縁よ好也

初時鳥

郭公待かどとさまり日数としへるる待れのらて出すいもたるゝ
神あるを待しかどは日数をさおほく成ぬる中に有しが一声鳴て
又今一声を待よ。殊か日数をふるほど今出べき声かし神あるや
待しるれ日数ハすくおかくハなるかしせさいふる也

堊護院宮五十首よ　遠郭公

ほのかなる神あるハまれいづくも声なき哉しれば鳥かれ
夜更人定りてハ世よ静なるまく時鳥の声も待ちたに出ゆ
べるに神なるれたゞのかそぞこのかゞくも声なれは也ぞのいた
くみ月中ならんの詞也

弾正宮三首よ　暁時鳥

まち侘ぬ月さしのぼる山乃端にかくれていづるほとゝぎすかな

雪よりも侘わびける時鳥よ夜ふかくて有明の月は山の端にのぼり

さらにたゞ入て後時鳥の鳴つる也月よかくれていづるなり

れなるを

まことなれ夜ぶかきハいとゞ郭公思ひたえたる折ざかりなるべき也

夜ぶかくハ一夜二夜乃事まれ五夜も七夜も重ねたる事也

あげしこそ忘れがたきの折のみも夜はよなれど重ざるらん　拾玉

池の面は氷やとくらんこぼす夜は乃数をつくしぬらんハ　拾玉 下

竹乃葉まくすがる白玉も夜はあけば氷とぞなる　月清 上　いく夜

のぼるもなかばしてあるましもなき鳴もすがきて思ひなるはの。

袖の上乃雪よふくハ絶えくさかりめづらしかるべし

かくてこそすまれる時鳥暁の月は明がた乃了息

時鳥乃鳴つるは心も面白けれども心ハ明方の月は山をまよひ

まかる時かよ鳴つらんハいつくよ面白からさかへれハ重ねて

かね(?)の時分ハ夜ふかくハ時鳥ともかへらくも稀にかくれども折乃

面白からけりなし書類とるなき

山乃くらまでこえまかよくてこそ声のうつる郭公かれ

明かの宮に鳴つらんあくさ後めぐる也そあるかの折ろき伴也

山のこまでわかるれども。よこをま許なる宮は時鳥れ夕ハあるこれ

なり也

時子た大納言家百十首よ

ほのかなるぞ一声も郭公声思ひけるの暁明乃そ

一本此題ぞ苦よ有。思ひしは面白氣をはぎ思ていだ

とくさして書類しるなもとも夜ハまだ出白までも同じ思ひは

まくさの折也。まずて又思ひもとくともいふるべし思ひ。枕の秋中

詠月之歌

東山にまゐりし侍従中納言の時。郭公なげ給ふ

こゝろしてきゝて帰りし

立よりし人をたづね行ん時鳥ひとこゑは忘れがたし。ひとよ

と夜もすがら来て啼しが。面白きこれはなしといひてみかされてまゐり

きゝし也。何事をも皆すみたる人にて亭主(ていしゆ)へはいさゝかもつても詠ぬ。

ちかくの宿は今日我方へ帰りなば非をしらてみし詠ん也　立縁を

名をそ残すまじとても人の心をおきかへし波　古今 恋一　立よりね

まてハひかるさかなれバ由井の浦のさゞしらそれ　拾遺 一　立帰り

人も来てこん杉原やかしまのしまや浪よせはる　後撰 古今

返し

時鳥くは縁は波をたづねやといひければ人やまきん

神垣を啼て帰り行人も帰月(でき)も又鳴来り帰るべきやとぞ今日

沙宿ありしにまゐりて。待かねたんと名のる也。名あるハ名ありたる也

猶吟百首に

あし曳(びき)の山ほとゝぎすきくとても猶あかしと待をゆ鳴らん

寺 山のほとゝぎすへほらひしける　栄花物語にも山へ入人ありそもなをそうれ

何いはぼらなりん　拾遺 哀下　山すハせるかれハぐれ事ハかり佛ぎき

み。とても猶うき何しそやらん。声にそそなくそそる也。鳴しく又

ゆく。是事なりて鳴かうにぞいひたてす也

よるならばそも今ぞきてつるほどゝぎすや初音(ね)ハそち鳴れ山郭公

寺 雲のこゑてや広ゐ生かうげゝさや立とまる天(ま)の山の峯はれゐる

雲　読人不知 新古恋一　葛城(かつらぎ)や高間(たかま)の山の何ならと啼まりく思ひつれしも鳴ける

なる郭公いひ。声々に初のかく思音の中ハ又きるほにして。待まなび

ふるしにゆかく今はよいそそれ初めも待れやかみ高う/\啼てゆく。

啼く初そゝ行く面白き也。近き声よ居(お)て。思ふ声の何かに啼されて

いろいろ面白くうたへまことあるべき事なり也

杜時秀

時秀おうぎかりてや衣でれうのこずゑよりうれ海ろん

時秀 初りて涙いろ〳〵ゆかりを我衣でれらつをかゝれん 後人云 衣ひれ 古文

杜子ゆかしき所の涙を叫てやゆかんと袖乃衣のゆうにまうし海る

ゆかしきまいろまでいつ也 ゆかりこよゆかるゝ灯をはくゝになぞく

うの新よりん八 かくべうゆかりをもゝ本来ゝゝもゆかるゝ

ふうれ 三帖抄 ゆかるゝ所のゆかるゝ海やゝゝ海つゝん初ゝゝ宿の萩はと乃秀

後人云 古文上 ゆかるゝ海ゝ地より南方へ来る紙ゝ也。衣手。杜ゝ海也

夏河中ゝ

うゝ世ゆゝたまをゝゝ初ゝゝ也新ゝゝ也ゝ

時秀 思ゝ事いゝでゝゝゝ我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

海の時鳥

あまれる住里をしよりの時を告しらせ稱まくらぞなく
海色なるゆふぐれ幸まれなるふねの住浦ぶの里おもむく。
洲さしぐるを。今夜舟をよせをれがまくれもをぐ其夜しるを。
深ねいの水よ泊てゆる俄舟まわる物也。

前の藤大納言家うたく　郭公遍

かくしらぬ里こそなけれ何を神られ福や人をわさきん
神をよ明ことを人をあるこそ何をの人をまれてぬをる事に中しぐ今いぐくの里おもを也。紙を
人をまれてぬをる事に中しぐ今いぐくの里おもを也。紙を
関しを。面白ろしぐ。今夜あまれくを面白しをどくを何を
を業紙をを也

聖護院宮十首よ

郭公をさぐ日より行覺れ広ろれくべよ世をくるより

早苗

神友の何分より早苗紙より。今も取也。毎日乃公也。格物論云。
杜鵑。三四月間。夜鳴。蓬旦云云　田家候其鳴興農事云云
古詩諸　此所注。張注密勤云。郭公ハ也ぞれ広ろ有く農事紙すく
ひる故ろ。をぞの田をさしを云をくを心少よ。ひくよるる。袖中抄よ。をぞの
をををさぐ広ろれ田をさしを云也何をい勧農の鳥ろて過時不熟と
ゆをしいろ時をれいみのくしを云義也云云をぞしをぐと同五音也云云
事長略を。二乃白い夏乃始よられをて　秋風の吹ふ日よりいづく
ろを吾こい結よ君ぞきを歌をる方一　秋風れ吹よ日より久方乃天
乃川の示ろ乃月よ方　古秋上　風ろの吹ふ日より春日なること
公れいい色付ふくる　古秋葉　此等の白ぱを也。秋郭公ハ　秋風の吹は
日よりをを同

おもふ心を

時ぞこやさうくろうん れれ系いろくもわろくふろおうぐこ
外服装ちすやれぐのれろくれいつもまろゑ志もするれ後会志一
れくろれの系ちいぱくもつどときいなろにさなくいぱ河系青田
ろれいぱくい其ぱろもしそ。成うゆるちも

八道大政大臣家三首　ふの田の子苗

ふくいい家ろくまくしいそぐまぐおうぐこさるくろく
系多へ薪ちぐどうにまくふくいぱくれわまぐ里が系れも。
帰ろべき家路をいそぐぱ多まぐも。系多こ宿ろある田長され
ぱ。家路近きまく。其同ぐれぐこさなへをろて最ゆぐう。時
路といそぐめも。ぱろくき家路や近き春の野に音ろりまてを
ろるにしも。冬平麦百首　引合ろろ

桃井宮ろく題とちぐて寄合をろまくとき

早苗

ぱろろもまづおろくおうぐあるろ田ちろくさるへろも
外のあろもぱ。先系への田ろ系ろてざるくをれいぱる田ゆくと。
ちれろも。系くよぱる田紙ろちは。さをくろの妻くふろ系ぐ
なろるる田いかくぐ系ちも。人丸秋百十　公家にろも。ろくを。いぱろ
立也　袖めくちいぐとろいはちもなぐれろ立田ろろんぐろ
ぜくさ　羨　系れまれもしろれるやまも世ひこくれろくろ田
ろれ面もちろくに　拾遺上

萱欲中ま

ぱくぐるやろくくるふれちぐの田井ふさるくろろ
氣波岑。常列也。滝田井。系波岑れ藁ろ在　ぱくぐれまの
ぐろそこれいば尾ったちろちぐの田井ふ形ぐ稼も。百九　系れちぐくと
うまくろ。ぱろれくりれぱ。ふさいふるくぱるまぐ也ろれろろ
ふかきけくねなくの類也　浅ふ世ろれくるもぐるれいば紀系わ

くれぬ秋いつくもまる（秋下 後人の歌枝を）汗さの風さひくもかりられ見いのふうれく
ゆる雪ぞふるふる

冷泉寺三首

西ゆくさいてくれはる人水ゆ紀汗ぶくをゆやうしん
沢田いぶのうしに稲をゆる也。依主釈也。沢れぶく水れ源さ
田也。持業釈也。雨て。水深さゆ沢乃中までいうくれどぶぎ
ハどうれさり人をうてうゆる也。汗い水のきいも。ふれくも也み
ぶぎうも同し

等持院たた大臣家を紀をうて七十を歌よまき
水　早苗

雨ぶて夕日さすうり早苗ふる田ふれゆをやぬをてかをん
西をもいてうんぶゆ苗をうもぶ。時て夕日さすゆ。ぶぶてゆき
ふうゆををををん也

清子たた大臣家の旬十首

ちくくまゆ神さゆめまてうれと田れ早苗ふうくゆまれ乙女子
あまの乙女子。常しは。ぶ沢ゆ。神をゆすん。澄田のさをくふる
ゆ。ぶい沢れぶも。神のゆうくも。澄田い沢ふ乃田也。乙女子れ
ふゆ。ぶれまを也。女。ゆ。ふ。非。あまの子。望れふの。澄也。早苗ふ
田子れ浦人ぶふゆ。ふも沢ふ神ゆうすん（若ふ。ぶ。ぶ。ぶ

もくみをもしりをせきうけてこれをうかけうるみをしろけ（後姫成長後佐賀城主百首）
いかへの社乃ことろあるいのまたぐ今もそれもけあまれしろいは（乃相）
川をへて市戸代小田と庵をそかまいはるれ乃月をえうふ（後姫成長後佐賀城主中）
社といえんとそ市戸といつう唐乃法ふ。家数をかぞへるふ。何十戸。
何百戸。千戸侯。万戸侯といつるは代は田乃町間を云て十代
をへいせぐ田をを。五百代と万葉にあるは廣さ田也。人田ぬ
ちろ式引也　石とうれ乃さ田乃ひいでぬもちぐたをへよ守て
をんの　標をうしとをうをを。延のを是弾よ社田乃れい注連と
引かう。ちろい神代の巻乃ちろうぐないは。ちををけ。ト領をうを。
縄をうをて張りつぐそをする也。標末とをうをも用しの也。社既
よりいかられしより社ぬ也と張りと。ぬそ。不浄と禁ぐる也。禁中
とちろの門をを用しの。此中へ入るものを。拘て妄りにをぬ也。
禁中を省中とを。師岩注よ省察也言入洛中省皆當視

察不可妄と省察也。社既も用しの也。ちをゆをを。前の
用しの弥をちゆう。ふ式ちゆう。うをををををを社と
ちををををををををををを。社をを乃人省ぐれの法ど
ゆうをんをををちゆをを人乃（拾新）
ををきいをををちゆををををを。（後人不知新）仏者よ仏田ををを。
人をを境より。遊女の本ををを面をゆる事。五月五日乃ある様
く儀式あり

おあ家をを　菖蒲を

拘おをえれおやめれ者を裏ゆうれ乃あやを乃新よ上をやをへは
交州の竹とい竹ハ拘をの間よ刈ふ。これい交州をる也。交州
乃ふ乃あをを上ををををしれあるをれををををををを。（保をを也拾交）
竹を刈よををををおあ式刈者竹といつう。交州の竹ハ新をを
きををふおやをををみを。五月ふをををゆる也

軒菖蒲

ハかりへけるやがきのかりとげをかりふくゆぐのあやうあぐらゑ

史記。李斯傳云。堯有天下也。堂高三尺。采椽不斫。茅茨不剪云云。日本紀仁德天皇紀云。自今之後。至于三歲悉除課役。息百姓之苦云云。茅茨壞不以葺云云。堯乃時の有様も。今刈ふくあやめにんゆるかり。面白とかりふくい。あやめ葺ふふふく。面白あり。さと倩用いて。あやとふくやうにんあるかり。面白。新いろの手は模様かり様とも也

水辺菖蒲

ふいかりふく新のうげをいてあやうぐさをはいを水

新しかりてふとたるあやめうぐ。新のそふゆく池のあやめもしふふよ。一入ふげゆふも也

ふるた大納言家ふく　菖蒲

あやうくもふやかくあるハ草ふやつとふゆぐみゆふん

若ふ草ふ草にやきうくあるハ杉ひしのまぐ出ふうける　後人不知古杉上

ふハ草ふ屋つくあるもれぐも。其ゆけふも。きふいあやあ紙ふきてぐあぐやうるれバぐやあにてぐかぐふれて。ぐやまふ家とる

ふ也。此中くいふつてふ叶ふ新

杉の家旬十首ふ用ふ也

ふやあ草ふきけうぬまハふ孫ども。ふまひみて柳ぐぐゆふ

あやあは淀ぐ堅にかりて。ふ新ふ。ゆかりくふふ。今用ふあやあは

いづくれ沼ふふ引きふるもふふくねども。ふよいハ。草飯れまふくま

ゆふ也。ふいて。草飯と。淀ぐ也にふふくて。ふ也。草飯ハ。草ふ伏ぐ。

園ふ紙也。ふるのれぐぐふつてふ用ふ也。孔あきふ。あや先ふ

草ハ方ふふふふのハあれん柳ふやい足ふ　江侍従ふ哀　まふふめぐ

ゆゝしく。五日の節供なれハ枕もするゆゑ菖蒲の枕とよまるゝ
例　故人引ゝ　そのやゝまかり移の床れ枕ゝ　雅家千載
ふるゝ枕自ゝ　ゝ　ゝ　後成卿拾遺
一ゝ　ゝ　ゝ　

草庵和歌集蒙求諺解巻第五

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

花橘

国ちゝ花たちばなの花い花をもとうくもひゝこゝろ

五月待花橘乃香袋かげ昔人乃袖の匂ひ哉

橘と者

垂仁天皇紀に曰常世国に遣はして非時香菓を求しむ是橘也十年を経て橘を求めて得たりけるに天皇既に崩ぬ不得復命臣雖生之亦無益矣乃向天皇之陵呼哭而自死云云国乃名の橘と者花を見るにも昔乃事を思ひ出るなり又さしれて捉ても昔ゝ

民部卿家三そ方

思ひいづる昔をとゝ〳〵橘れくかちるけとれ夕くれのそら

橘乃花散里乃四ちゝ〳〵ゆく白〳〵杉ねさ八万橘の

花散里たかしいるばゝ郭公ゝよ後やんうも万九橘の花乃

ちる里ゝそゝふくれの何かゝるれハ一入きゝ昔成思

出るもゝけゝそゝはゝをさゝてゝちゝ

れゝ〳〵家十首　夏木

ゝけべゝや花ゝちゝかれゝ杉ゝちゝゝ杉ゝ杉ゝ杉

誠ふるの雫にふるこれ井のあるぞも人こ別ゐるぶ　実之拾雑之

本ふるふるあるとあれども五月雨ゆへひとしをなさるかぶ

ぶて一向よ人もしまぶらせひとしをハ汲也

滝　五月雨

滝滝津とてまづかきそりあのそこやうるこはさきを

立りあるよりあれまさりくる体也ぶくうくは滝くもぶて

まれるは堂へ立くあるゆもされもこの中なりと

昔はまづかくよく滝ゆたは立りあるよ水の落さうくるゆへとて

名也飛滝直下三千尺疑是銀河落九天乃ぶり

金蓮寺ゆく　五月雨

牧ゆくさ測とやちんこるの川日ぶとはこ落ゆりあれに

滝くこれの岩ゆ落るみるれ川ぶてつりて測とかゆる

防成院お志之　ぶ乃はりて測とかとりを立りあのりれてつるゆ

水もはりてあくゆくゆまくつよく測と成べきこと也

等持院紀方丈長家　五月雨

みるれ川波もちんよくるれもぶうはんりあれころ

立りあゆ水はさりて波もるくこぶもし月ぶ桂ぶ落こと也

雲浪相波と文集ゆも有ぶ成波こえるぶも有べし

花実白殿ゆく　河　五月雨

わるぶぶゆあこ勢こいさや立りあよ水まさりゆくとこけ面こ川

お上の床れとるいさや川いさこ岩くぶ我名り成る　成　お上乃

床乃とるいさや川いさこをきこせわるぶつげする　人先方　土　いさやこハ

いさこ不知とかきてこるぶこ也やハ助字也いさや川と有ゆくい

つぶ常にいさこぶこも詠をまれこる也床の上川れあのま

さるゆ人沙汰しいさこるこ　床の近に岡　大上都也　水の深くゆるこ

こみさる床ぶ近に岡大上都也　水の深くゆるこ

聖護院宮五十首より

わかれつゝやそがれくりの木のみ　ふるさとまつ　すげうらん

われつゝやそがれくりの木のみ　そゝい衣也。衣をそゝゝ。おりんども。御衣也。かん

みぞし。神巫衣也。袖も衣手也。御衣掛。御衣櫃。新衣の儀

ちり。衣ぬぎてゝゝ。ゝかの川ゝ。ゝゝ。水のみなかみ

ゝけさう　ま　菱　ゝれそがの川ゝ　万葉　ま　菱　ゝ

ゝ。やそがの。ゝ。萩。ゝ。葛。ゝ。新也。曽我川ゝ。ゝ

ゝ。水のまさて。ゝ。ゝ。ゝ。曽我川ゝ

類字ゝ。出雲一説ゝ。下野也。梅ゝ。大和国。高市郡。

ゝ延喜式。神名帳曰高市郡。宗我坐。宗我郡。比古

神。二坐ゝ

左大臣家三首より　藩五月雨

五月雨は月数よまさる水くされ杉のみをしへさそはぐらん

杉のすそ　神ゝ　藩のさゝぐ　水ゝ

芝。迫。ゝ。ゝ。五月雨は月数はまさる。水も雨さ

ふるゝ。ゝ。ゝ。

わさうをもきてもどみりあれ又ふるびはぐれ岩ぐ
岩角のうえ所ハ水のせうれて淵考うれくるよ五月雨にあ
まうて岩ぐれそうれそうれぐるぐるぐるよ五月雨にあ
ぐるぐるぐるれもかつぐず音もせぬ也

池　五月雨

さみだれまさるかさまうそうれて在て波ハ池のうきき
まいめれハ身を流まのれをたえ〻さとふみあばいうんとぞ思
小野左衛　ふり雨ふるまさるゆく池乃流まもゆくさとうれて在〻方ぐ
も出てうさとうも出ぐみうハ絵のようくづうて年ばいてご一方〻方
作也

浦　五月雨

浦子たち大納言家にて

まうたぐみいまやうふ免れうふ雨ふるふ五月雨にて
浦と流ふあの浦ハ百舟のうとてうぐべき浦なうるうしう方
三大

如浦　杉列也　岸うふふふうくぐりをとうて五月雨よりそのくうる
かうして流もふうるゆうれいのうけてくるとうれいくふ流ふくみ
ふそかうぐきふも也ふふあの浦ふうふけうる也

杉ふ一ふふ作也

乃ふうふのふふふふあふを杉ぐべ一浦の入にうきみぐまれ作
捨舟ハかうぐあそのうれふをぐうるゆく杉うる也五月雨ふれうきゆく
あまのふうまざも流て舟の用もるうれハ流〻捨ハとあ舟毎の流
ども帝うう入ふうはるうきうゆくをのぐ一雨ふ杉うる也

民部卿家百首

五月雨ふうれみぐるうふん波まふうふ雨ぐれくま雲
五月雨ゆく淵ふ海ふふ流ふうて岸の汀ハ海ゆ流ぬて汀ふ流
れも沖の波ハ軽れふる也汀乃かうふん岸の汀ハ海ゆふ
て人〻ハ汀ぐ流乃上の方へあぐまうる作也

暁五月雨

あやめぐさ　ふかきこころ　しるらんや　ただ　ひとすがら　ねぬる　あまだれ

あやめぐさは　ふかきこころを

野　五月雨

菖蒲草かりにかりてやまさるらん　野沢の水のあさみさねの上の
五月雨ゆへ草のもとゆ　流れに浅さもはさう野沢の水
ぬれつゝさゝ分ふるいてまさる也　比れはいとゝ也

源大納言家詩合　友則

夏草のもとゆ　夏草のもとゆ　夏草のもとゆ　夏草のもとゆ
草のもとゆ　朝ゆ　夕ゆ　秋ゆ　冬ゆ　毎年ゆ　毎月ゆ　毎日ゆ
ゆ　上朝ゆ　夕ゆ　秋ゆ　冬ゆ　物ゆ　物ゆ　物ゆ　秋の野ゆ
ゆ　しゐの袖ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　夕ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
万葉集に副て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

建武二年四熟子首ゟ　蓑の植物

こゝに系のはるゝゆゑ代り夏草のごとくなびくとゝ何ぞ和哥にさゝるゝ代なれぐ夏草のごとくなびくとゝ何ぞして易るゝんや言はれいかゝ哥也　詞花言葉と書けるを乃ちげ〳〵ゝ緑ゝ夏草の紙出しゝ夏草はゝゝさ物なれば物くゝはけるゝ　根ゝそんはをばちゝで夏草はゝくゝ人乃郭のゝ流ゝ　いそでは伝とゝでゝ也ゝゝ稀ゝ詞也　同じくは流ゝをゝるゝはのゝ水ゝのゝ紙いそでゝ流ゝ　仮とた

のゝゝちゝゝは成ゝゝゝ

乃ちあしたとうまの也

民部の家。芭蕉の葉

夜まの打ちをこよみくぬ萩の葉と共ちてこぼれ夕風

秋萩の葉うてぬいづれが萩ともえうるよ風が萩の葉を吹

て外乃まとうの音乃ちたい萩の有くいとくしたちもんこ

ち吹るこうの也萩ハ風とよくくらて音のうの物ちれハ也

庭の芭蕉

庭てはとくちぎくぬかくもあうきりのばくと芭蕉ハ雑ごろうん

芭蕉の陰ゞさい芭蕉刈てゆいるて。陰ゞさふちうの也。庭乃面

乃ぞくうて芭乃陰ゞとうれどゞとも芭蕉さゆ。色と同じ

ゆくに芭くゞ成ていづきゞが色ともうくうの也

金剛寺三首　鶴仙表

あれはは此とちふ庭を吹くきりれちやうづくれとこちのくう

義うくて傾うくて里と出ていうづくゞ蕉井くゞ成うん行物迷くく

ゞ成ちるくば新くぬて吹ちんかうたぶやい老ごこげん日春の庭

ゞ芭てゞ此のゞくく芭ゞきげうて。庭ゑも咲也。ゆうの有い新

ゞ傾ゞうれゞうたくゞ咲うう庭ゑい。秋い新の庭くぬべきう也。庭ゑ

を。移る庭ゑいのけうう新井くい芭蕉ゞ成ゞとゞゞゞ咲

より特くゞ我ゞう庭ゑ乃花ゞ思いちうくよみをゞやよまゞ

ちうゞ庭ゑよゞちくみうる庭ゑ之補拾忘之

芭持院宿た大臣家ゑ前ゑ　鶴川

玉造やゞ七流をけゞうちあい川うくまゞくゞ成ちうふ

玉造。肥前。杉浦ゑ有　陸奥　五月雨ゑ八玉造川ゑ市毎ゞ七流の

流ゞ玉造のゞ川とゑ家いあれゞ芭蕉ゞ成ゞ

しみあいさゞあうき万五　杉ゑあい雪ゞ毎をうくのゞゞそさて

毎をゞくくさゞゞ。杉をゞくくゞ也。ちゞうふ。紅葉ちうゞゆうゞゞ成

さしよりてはさんくよりの間よりあらぬ明るまく河とあぐるあ
くるこいてうぞ何とたに落る四ぬ明る侍也短歌の詩をいふ也

重護院五十首

よ　世川いとあれたの中をそやくぐれ移舟とる紙結ん
流れていい妹背のとれ中れ歳る古世の川のようや世平　法名和
妹背いあを結てをてをしぬ古世川も妹背ふのやれ中れ歳ば川
の移舟もあを結ん妹背ふを人のいとせはゆふいいるとも也妹
背ふいあをの纏二ゆ院ゆ所より一里ばうれに川ゆ東
う妹ふ川ゆ和ゆ背ふゆ俗ゆ古世の上市ゆ一里
解ゆ弱門へ紀ゆ和ゆ川ゆ弱ゆ和ゆ紀別
和ゆ浦ゆ和ゆ紀ゆ明ゆ和ゆ紀ゆ和ゆ紀ゆ和ゆ紀

清少納言家にて行ひ侍りしに

をぐらの山ぞ思ひやられける

小倉山峯たちかくしかくれぬれば

拾雑 とりもちのわたりへ森乃ゆるぬまんといふ。特人ぐ峯にて立朝

て。森と行ふ。ぬるる。森とくる。岩ゆるれて。れりゆを。森るまい

火よりわゆを。るを射る也。そのまい森とけて云。そのまを。紅

葉に妻。まちるふとれ森まにくゆ。初也。なくんい

行乃字の誤なるべし。行の方ろ〜かろ〜。さそうやな紙れまて

でしまうんタいまれわ〜ろ風 寂蓮 夕暮れのくどれまうへ

吹風と夜ゆく森も時雨へいきか 良選けり 山数ゆかり

月家三首

曉夏恋射

うの緑ゆく木のた雲にうもしる

月ぞうしゆ思とせえうぞのくゆ木下秀い乃にまうりう 紅

まれるゆ紙乃まくゆうくけうて時秀ゆ月まうあうと勢 万二

明けの曉秀ゆ或宿れ萩の下葉い色分にうり 人九拾雑 万九 曉い秀乃ぬうく

乃ゆ萩ゆけり曉秀ゆ宿ゆ紙ゆ。曉い秀乃ぬうく

ちうう来をいつ。ゆ木ゆけ下ゆんぞ。夜乃明るまてぬり

一入くくる紙ゆ

獨吟百首

明やとれうゆ紙をう移てうくふいづるを行さ夜ゆよの月

夜の月ハ出れいかぞ〜明るゆ。ゆ夜のよいまさ雪

なうゆ明ゆる紙をのいづくんゆ月やぞるんうそうぞ。さんゆ月の

出るうゆ紙をのうゆ。ぞ夜の月いづゆどうのまく明るゆ。

まゆ月を。て明ん来れわ〜ゆさうるゆぞ。ゆ都てわ〜むゆう。

ゆやく出るゆ月。わ〜ゆぞよのとゆ也

乙巳月

ちぐでだふみつる花しうれた夜ふのちげ光木はれた月ぞ哀り
ちぐでだよいさわ哀さんぬ也ぞ月を行て哀ぞ行そにて
ちきさんぞ夜ふの哀りうる木のうまを行月いぢぐうあぐでぞる経
もなれよ。ゆてぞ月もそ行ぞ哀るれい。哀の神ぐ今あのまんて。
いるくみう神もうきを行ぐ山也。韓湖石邑山中詩曉月
暫飛千樹裏　三体詩律

夜月

ちぐでふ明るう月れいうみて北あぐ哀まぐ行りあぐうん
哀のうたまぐ雪るうう明るう行哀のいぢぐに月ぐうん　伝書吉文
夏れ月い半天すぐも行ぐてぐぐ雪れまふ哀の明るぐうに
忍いうぐ也ぐ神ふうとぐうもうそぐど明るれい。翌暁よ。哀ぐう
いえ出ぐきれぐうて天の月道と行あぐうぐ也。遠ぐ多

月いぐ天うあぐうもうは十九分度の一と又牧ぐ。運ぐをうれ也。
うのうん宵に明るうぐ歳ぐもうる天をあぐうぐいく地下とあぐう道を
きまぐ間の道と行ぐうぐ年不付て翌日の俊をえるあぐ
うにいぐうて天地をあぐうぐうあて。翌暁のうれ今るぐう也。
面白趣向。奇妙の作者也。ぐまいいぐ年ふうのいぢうぐ
ぐうにうぐ紙出ぐうる也。畢竟天を行あぐうんうえ也。月
行道の事。書経堯典より委しぐ事長さゆく略と

金蓮寺にて初めしんを

夜草れ哀まの哀の衣かさねまふ哀ぐう神の月をあ字ゆく
哀菜の哀ふう衣きしぐあよ我衣れいる何ぞ白さ方ぐかる
月い。神の哀ふ月のうはる也。春夕月るぐ。夜の衣。哀を行て。
ぬ行衣をかさねまふ神よぐ月の明行いる月。縫衣の
ぬり花とよくいのぐる也。哀ふう衣かさねまうれ。ぐれまう行也

ゆかしくてゆきし路の菊の香はまがふいつるのとりとまれいるたうん　陸放翁

乃新也

岩こゝて今ぞ知る荻いもぐかをまたにたく数夜れ月うを

岩とこゝて今ぞ知る荻いもぐかをまたにたく数夜れ月うを

紅葉ちれば今ぞ知る荻いもぐかをまたにたく数夜れ月うを

荻いまこそ雪のゝ明わるをのゝ宮ぬ山もあるべ岩いの山岩也。

西乃岩をこゝて入也。東乃岩とこゝ西岩へ入ものこゝ行

不二乃間

民部卿家百首よ

うゆく末れうるとゝびこゆる行ゆるゆるみ山ゝなくふみ山ゝよの月

かさゝだい。鶴　和名　烏鶴　淮南子　遊仙窟よ　ゆもあがゝ　列子　淫氏。

沖舟　李人。洲　磯　よゆゆるかさゝ　ゝとゝ　鷺　ゝとゝ　宵　魏文

帝　紅歌行よ。月明星稀　烏鵲南飛　とあり　鶴の岩と

ひこゝて時行ば夜の荻深る月ゝ　陸人家　李白　岩ゝ　岩ゝ

こゝて明ゆゝ有ふゝ　李人　岩ゝ　岩ゝ

ゝ山ゝの外ゝて月の明る紅葉乃体也。ゝ山ゝ外の山也。岩

ゝこの方れ里ゝ

入道前太政大臣家三首　山萩月

夜ゝい木ゝもゝゝ村ゝのゝゝをゝゝ月ゝゝゝ

夜ゝて月のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月の

りゝゝゝ木ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

木乃葉ゝゝ手をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

萩月を

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うきてゝ。ぬつまやとゝみ。兩下しつらひてまやとゝし。四阿い。ゆ西
造なゞ。のまゝうれ。四方こ。高うもまやい。射屋造の。西方こ。雨
水乃。高う。紙こ。のまうい。軒也。宣業ハ。源氏行幸。こ。人
づまれ。ゐ。ふまづ。ゐ。本屋乃。まやのゐうに。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
細流こ。まやい。本の屋也。のまうい廂也。本屋の。巻に。さしこゝ。
葺やちげさ。本屋乃。のまう。行る雨ぞ。ゐ。ゐ。催馬樂
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。母屋。源氏。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。表屋也。表向の寢殿也。ゐ。ゐ。通音也。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。酸也。何ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
清水。ゐ。袖。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

ゐ也。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

等お。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ

を打ちくらしるる也

花山院中納言家五首　浦夜月

みくまのの浦こく船れかのくと月をいとゝ哀とゆるみしら夜

弥くまのゝうらこく船れかのくと月をいとゝ哀とゆるみしら夜

舟乃帆くらけそ哀のかれくゝ明るこゝろ　問　まのよれわ夢の

そかい舟かのくとつくこゝろ　碩　湖入名　後古考上

江のゝ小舟かのくゝ波またくすしまの明かり　注家古歌下　新拾撰考上　新乃名い

夜乃哀ハ月と日ゆくよわ　どうぶ　ぶ

さらに哀ゝうゝくく明るゝと月をゝたこゝろ月と日道せ

ずてゝうさゝゝそ哀乃明行とゝろ

前宮白殿ふく

みゝう哀のかれさゝふかけぬまどかげハあるまれ山のくゝ乃月

篠のゝ　ゝ　ゝ　

くり返しかたちげくくも結んし思ふる（後撰集巻四）蟹乃糸はえ
引出と物なるゆく交引とも　立田姫かざれ玉のをくよいく乱よ
くりとえんゆる白雪（清輔朝臣）一首の歌は古今出うり本文とも
一那。古今にかれの新はかし。反引の糸とそたとうそぶ成つ
ぬきこれも。緒ぐよりて結てれハ。玉乃乱るかくえて蛍
乃うくもよりてくよりた也

江蛍

いせれくこのをのくうえく花蛍にたとしいろいろ玉くそうる
伊勢れ海乃浦さちださの塩ごいよ。なのうえやつまんかいや
いろいろん。むやいろいろん（保元系の説）よりおりあまのいろくあらうせ
見えをきくをたちくびしや君（万葉）よりびをみうるふたなださて
おりをてあまもしをづれなくくづとそえく（行幸巻）は今の下れるの。
格を用ゆうう。頼乃玉蛍とまたえうう也。本文とハまとい

乃うくゆ。蛍乃玉乃ハ。おまもいろうくとみて。ゆ。ゆ。ゆ

久しとあるを風雅をしらぬ人は
みなすていとゝ老ぬ方ちうは行ぬ
　民部卿家
ほたるこそあくがれいでしたましひ
蛍よ　のゆくへ思ひよそへてもや
夜出乃躰　なるらん　拾遺　人はなを
ちぐさ蛍ゝとてつゝ　ほたるこそ
もゆる蛍ゝとなく　ほたるも
ハ人ゝ　ほ　ゆ　ゆ　ゆ
名　ゆ　ゆ　ゆ
　弾正尹親王家
ゆ　蛍　ハ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

田家春望　後古今
ほたるのかゝ
ゆ　ゆ　ゆ
　深蛍
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

つるゝ（仲実協一百首）　此句ハ拾遺の長哥をとりて云てこう。草の深
き宿ゆゑ。螢も世にかくれすむとの心。車流がゝと
く。螢と窓よりあつまりて。書紙徒らに成て。螢ハ世にかけを
ども。学ぶ人の事とゝろづかぬ心

草の間の螢

秋ちかくなれや螢も若草にまぎれ家ゆきそめぬるか
螢火乱飛秋既近（白氏諭深宮下）　道のべの尾花が末の枯しゆく
今更何のわかるゝ（例）　草葉末より結ぶ白露はかなまくく
こそ思いなれまゝ（後拾遺）　老や秋近き宮の草まくら云倒
句なりけり。倒句。結句の次より出こう。秋近きゆゑ草消ぬる
を螢の思ひ乱れて草の葉末の露と消し様よ新の新ゝ也。
ゝいと火の云ゆゑ新の哥ゝ。思草。如尾の花
をも云ふ。入ゆ蓬草ゝ。蓬ハ雲消物ゝ。

思草と云ゝ。恋草也と通奥説也。秋林良材云。思草ハ草の
ゝ。ハ非。草ゝ草ゝ。なるゝ色葉和難云万十八乃ゝ
尾花ゝ。草と云事。思とあるゝ何の物ゝ。和云思草紙いるゝ
草と云事。思とあるゝ物ゝ。或云あさゝと云。草ハ
一本ゝ生て。唯一筋ゝ。しハ思草ゝ。二ゝ
ひくまの〳〵かやゝ下なる思草ゝ。こゝ
すゝおゝ花ゝ乃思草消ぬるハやゝ出べき。右秋林良
材云。小花ゝ。ゝ花ハ。竜膽の花乃。ゝ枯ゝ
ゝ成云ゝ。存云。思草ハ。

陸奥守弘氏歌をさくりて哥合し侍し時

水辺螢

作者部類云源の弘氏。細川陸奥守。四位。風雅。新千載

作者

ゐれ面よりゆる沢色れほうふなみまつるさうあるん
けついけすもつこずとおつ通也清也 鳴声もきこえ出る
思いさん人のけつよいきゆる物は蛍 表 あているばかりとなる
べきとうしけちきゆる物も我いちづかけちもけつも同し。
野の鈴の雪よ沢と火いれ水とけけとたゆの面とも。蛍は消ん
火ゐれい何とけけとべきぞとも也

れをーこころを

いつー氷いいる思いいはちぐもちぐまりてどうばほうふ
いこ清ゐつくこうけてこうう 思出るときハのこれ岩はくぐい
くればこそあれ忘るき物を 法人名知 古名 此格也いこん格もいこん。
勢いせで身をのここず蛍こそいつまさうちいなるゐ 蛍 表
沢蛍よ妻ー 恋代よ多仮ふのいこ清ゐこぐれうとこい
ゐうふ 九字ち 紙下 思いをいこずーしてはくぐも清こ思ゆはくこうゐ

て。本紙おもかくれこそばかりうれてとぶ也。岩清水。名所あるとあん
どもちこほゐで岩根よ者清ゐ也

入道前大政大臣家三首よ　蛍

飛はこうこうこてかくれぬこうこいちぐでやされこ祢を思ふこん
蛍のこいこゐゆゆゆゆこうや世はくくれぬ物とゐ格といちぐぞ。
祢ふもたてこ思ふ事よ。一句よ 寄ふゆこくなんけうこも蛍い
時ねゐくれども。こいのもこてかくれぬうは。思ぐぐこもなけいこ
と詞をゐうけてこも 用ふちぐもかくれぬ物は 表 出の身ふと
ゐまはるこいせこうう 松 文字 和語 沢蛍よ妻ー。さのこいゐ格よ計也

萩 秋中よ

こいよいゐよふこいとこ蛍ひくうりやものこうぐなうこし
思いよいゐ公の迷ふこうはゐゐ思ふ迷ふぐぐ幸るれぐぐゐうこと
こうぐこて。迷こぐ彩こうこ

とゝ蛍わらはのそゝてちるべとやくこゝとよいみもこゝてゆくゝ
ちるゝらす何ゝのやなくゝまれてゝてゝんゝいのゝこゝてちるゝ也ゝ
後人の和 古文一 蛍のゝいれ火ゝげちるゝよかゆゝ高殿ふも。やりいゝもゝて
ゝゝるゝんゝと也
元ほゝすゝゝゝてゝてゝゝたゝてゝれゝゝゝゝ川のゝゝゝゝ波まゝ
鳴ゝゝゝゝ蟬のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ後人の和 古文
ゝゝゝゝの金ゝゝゝ丹後也。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ詞を
かゝれてゝゝて。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ほれあはぬまをぐんほれて水のそこ　俗也　打つまじ神こそは
ゆへ　梅花あるとやちらん　古春上　ちらにあらとそ中ん也　まを
く　ほれて　あれてそ　あるを　蛍　いちんあるとちらてやらんうの
あるうれそぶ也　蛍　い　水のあるうれあるわゆへ也

芽杉　俗　杉　大臣家三首よ　蛍

蓮　ゆ　ゆ　ゆ

深くさ作也。捲荷恩被微風觸鳴下清香に露一枝偉

三体詩絶句　仕公よ叶て

夕立風を

ふかなる物ふれそそぎ風ふをそそぎ夕立ふれを
ぶとの樹乃葉の物ふるまだて吹風ふ夕立の面ぐて降ふるぶ
ふ事れ勇てもふくゆふ夕立の面ふ音ぐさたぐんさよ
ゆう。山雨欲来風満樓　咸陽東楼。許渾。三体一

此物ふと風ぐことぶ表ふ乃ふふ物ふ平ふ夕ふ立ふ乃空
生一面ふ乃ふ吹物ふと風ずぶくぶのくふをのふ乃ふそふる
ふ乃ふ空て夕ふ立ふて物ぐさふ乃ふ也夕ふ立いかふ乃ふ物
物也詩渾ふ作ふ乃ふ

二條入道大納言家ニ三そ

ふまぶやかふぐけるふ風ふ物ふふれ夕だふれそふ

夕立ハ一方ぐふれば一方ハふ晴て山風ふくふれ夏ふ
乃ふ物ふする也物ふふ乃ふハ物ふ物ふ也。往還。往復。来加也

夕立雲

仕里小ふ乃ふもふしふれを物ふ乃ふてふふ夕ぐふ乃ふ雲
ふ乃ふ誠ハ雲ハ事ふ浮ふの岑ぶふいて物ふ物ふふ物ふ夕ふ
ゆふふふ乃ふゆ仕里ふまぐいふ乃ふ涼ふくふ乃ふれぐふ也

白雨

夕ふいふ板ふ木ふふふふふふふ乃ふ物ふふふふふ也ぐふ
夕ふ立のぶふふ降ふて板ふ乃ふ物ふのふもふふふふれぐふ物ふ
雨ふふ乃ふ雨ふを山風ふ乃ふ吹ふふふふふふふふふふふふ
ふ板ふ乃ふ物ふの夕ふいふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

つまとぞ相通也　例　[illegible]

松の下雲　若京陽行　彩ちぐ

倘然一雨送輕飈客夢驚回夜寂寥

剛道是晴還不信檐聲和月落芭蕉　夏雨盛寂　異錦集段　よく

似ぐう詩方也引合とくし

山蝉

山風のぬる結ふいなくせミれ寄ってて松ろひぐ寄けと

山風のふけば松ろひぐきそ寄のなれど山風ろ吹ぬ間に蝉の

鳴ろれとろぐするつち寄れひぐきれ寄ろなる也。蝉の寄ハ松ろ

ひ[illegible]ろ似ろ抑也

なく蝉ハ[illegible]ろ寄の[illegible]山風ろぐ[illegible]ろ[illegible]ろ

蝉の寄ハ涼しくまろう又暑ろ松ふもよろうぶ寄ハ暑ろ方に

まろう　例　[illegible]ハ蝉の寄きくろ[illegible]に暑くもある

ろれ　後義光治元年六月　度浪文合堀川院清涼　楠ろ[illegible]涼しろ物也　例　風ろぐなろれ

小川の夕ぐれ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ

宰相典侍奇合よ　久和源

後宇多院宰相典侍なるべし。作者部類云、番議者歟。

雅雄女。新後撰。續千載。續後拾遺。風雅。新千載。

新拾遺。新続古今作者

おくせられてかたきこゝろぞ苦いてく情よりかるる風をたゝ秀

嫁の琴人は時々ならする夕音をよ風いたく情くと毎人待涼し

き音をたなるべし。雲果るよ。雲涼さ呼分也

暮秋中よ

秋ゆくぞ秋の名ハそもそもれ名のまうきを紙をしてぞ夕

外面なる橋の例そもそもなる橋の本後よりくろいてまでぞ

さ秋ゆく夕月の秋ぶ　拾玉

雅有玉　秋下

雪時のゆく秋の夕年　詞也　我宮ぞこの住ぞ夕ゆくてゆ

ゆゆ紫をゆくしゆくのも秋よをこゆる　後拾遺　雅二

洲て也。本後さ秋風の夜れ四ゆ洲て後ゆく涼しき也

秋ゆゆく雲後ゆゆされ夜年に夕後ゆくてゆ也ぞゆしき

五月ゆゆ乙女をゆて夜年の雲後ゆ涼よゆゆす我い五月雲後

涼。後後也。奴後ゆゆ也。ゆゆ也。ゆゆ也。近江。安房ゆゆ同

名ゆゆ。雲後ゆ涼の夜年ゆ後ゆゆ風ゆ後ゆ涼しゆ後也

清ゆゆ大納言家三首よ　雨後雲月

村雨ゆゆ後ゆゆ後ゆゆ涼ゆゆ月ゆ

村雨の降ゆ月ゆ涼ゆゆゆ涼ゆゆ後ゆゆ月ゆ

ゆ涼ゆゆ雲ゆゆ也。後ゆ。曉。雲ゆ

等拾遺。賀。大納言。夜雨

ゆゆ後ゆゆゆ

夏の端にかけそよめり　納涼

たゝぬつゝ秋和義門下家にて

なく蟬のえだうつまれ夕り影乃ちるかとゝじれのくれまち

夕日い暑さわすれぬ　夏の首　納涼

ゆくてなる暑ぐのわりげ　ぺんに涼しうなる

小お流絡を大臣家の首

じまた姫をしもとじこ寄八乙姿こそたなけまきつ下り色

常盤乙八四時不変の京色なる乙こ古涼ようこ変化り　月べて

しも色ういれど乃藤たなる乙こは秋もちゝれざりけり　某　新集

ぢんこれはの乙は吹風乃ちゝやれをゆまこるもん　紀友もち　古秋　あさ涼

霞ゆる空乃春ときこゝやとこれはの乙と春乃紙ちゝん　公教卿　全春　風れを

ちゝ夏ときこはの乙里八住人こゝやれもゝ乃ちゝ　文方彩　古新中　此類井かし。

門か暑乙庵よも出てうぢ　涼しさまこはてい　つまでも

あく事もあゝどとゝいで秋こ絶をよくこんて絶事こもあゝどゝ也。夏

たゝれは涼しこ後也夏ちゝ乃ぞの外など云同ゝ事也四時不変の

とちうゆゝ夏こつゝ事もなれと秋風の涼しき事をはうこゝい

ちゝちゝ夏ぞけまこば秋をとあゝどとよみゝ乃涼しこ夏ぞけ

事もあゝどとあいこんれ乙紙のこゝう　松法乃冬井れ水をむ

すびあげて夏ちゝれゝこゝいゝる乙　松つゝ風い涼しこ　拾遺

地を出ゝうゝ松法い涼しこゝあを出ゝう

夏殿院の宮泉殿あく涼ぞゝまゝ　ゝうこ同ゝ乙を

帝王編年記云寛元四年五月九日上皇御幸大相国大

炊御門京極水閣百練抄こ吉田泉殿と有泉殿ハ泉

乃ちれ殿閣也水閣水殿滝殿共有雑部加賀こ泉屋

と有こと同之類宣明用元寺水閣杜牧詩有三位詩

ちぞうゝ本れちこ法をちぞ　乙泉いこれ水ぞすゝしこ

そもそもこれも水なれば涼しきに成木の陰をけるゝ
ふ中をいでゝ流るゝ泉の水なれば涼しき迄泉い地より
づる水なれば也訓ずれば紙出るとうけて泉れるとそねていつる迄

二月朝生家五十首より　泉

立ぬりあとゝきてうん石ま紙ノ寄ることすゞしさ
石まの打ものゝ寄波立ゝ
二乃白いおすもえ出ぬうん也我方へ立ぬうて扱おすもうんとゝ
紙ゝ非紙ゝ立ゝてなゝ
立ぬうゝ立ゝきてうん松浪やを
紙いなゝのゝ紙浪ゝ
を用ゝ也石面を紙水乃
すもえ出ぬうゝて涼ゝ
清ゝ乃大納ゝ家白十首より

せゝふ入て待ゝ人水れゝとゝゝしゝい秋ゝもゝゆゝ水のゝゝゝゝゝ
水せゝゝ入て涼ゝき家ゝゝん巻本　芳野川せゝゝ入て落ゝ滝は
涼ゝ人乃ゝ山のゝゝゝもゝゝゝふ拾雑上　乃ゝぐる水ゝ秋ゝゝゝゝゝ
むすゝ泉れゝゝゝ涼ゝき中務卿千文　秋を出ゝゝゝゝ秋ゝゝゝゝ
ゝ風ゝゝゝゝゝゝ山也水い物乃ゝゝゝゝゝ流れゝゝゝゝゝゝ
秋をもゝゝゝ涼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

茅葺院縮た大臣家ゝて泉避暑と云ゝを
避暑い暑ゝ紙いゝゝいゝけゝゝ山。紙涼の事也典略云。劉裕表
紙。三伏晝夜酣飲以避暑云　按ゝゝん是を河朔飲
共いゝゝ荷採ゝて酒を欲ゝ事有ゝ開元遺事云長安
冨人毎至暑伏中各於林亭内棹畫柱以錦結為
涼棚設坐具召名妓相為避暑會云ゝ人

人避暑走如狂（白氏十五）

きたいつくやどそて涼しさ覚つくこの水ところてや妨れさわらん
常本巻の詞まよ出さりぬ世さ入てるの涼しき宿ハ出さと侍ひ
くろみとるるとめてまぐ夜ちぐ妨ハ中にこそてあるを
体をそ世こめてい水を妨ハ中にこそてあるを

金堂寺にて人々歌よりて侍し時　細涼

お妨れ実ハ清ろれ名とぐ妨やいてまよ妨れまさうを
関の清ろれ色の名涼みハ妨ハ涼しもこれやるてんぞは
きとしてまを妨よいけうを妨ハ涼しもこれ妨ハ涼しきを
涼しさ妨やうてそうせ川古川のべれ妨の下陰（有象彩古文）引合を
しやハのハ名ハ名ハ名

定海僧都。勧学院の隣のあるじ名所を後
ふるさとの人々歌よませけるこの志かく幸浦まい萬
定海。作者部類云。定海。山の法印。勧学院。續千載作
者。仁寛法眼。子云云

月そぞろゆゑとはなしそぞ波やちるとは松ばかりぞ
六月の末のそぞろする夕い涼しきぞ波やちるとは松ばかりぞ
風のすゝかく思ふせいぢ波い。湖水の幸よしもぞ波やちるとは
いつ尽。湖水の志賀とゝ侍也。袖中抄ゆ委し

海の夏綾

みそぎして秋をわすれ川のきて夕波たゝく風ぞすゞしき
なごしの大祓ハ六月晦日なれば。明日ハ秋なる祓多川て。浪
もゝるゝ風も吹て涼しき也。秋ハ。明日と祓多川よりつゞけ
そゝり

陸奥守。弘氏朝臣家みゝく　六月祓
弘氏家。堀川。錦小路。見太平記廿七巻

祓　稜ーてあされくるゝて川の淑乃井をれれろふ夏もとまるゝど
井せきい水とゝしるゝあれにもくれと。夏もとあるゝきに。夏いゝ祓
らびなゝして。六月晦日小麻ゝれば。麻の葉となゝして。祓すゝ也
麻いみそぎの異也。みそぎ。麻ゝ葉をもゝゝ也。麻の葉
もなゝ祓て井せきにゝゝ夏もとまるゝ也

等持院殿。大臣家三首よ

水の面よゝなされ葉ゝゝみそぎ川ゝれもゝゝゝゝゝゝゝ
六月晦日ハ一年の最中也。年月のゝゝゝゝ年をなげきゝ
ひゝゝゝゝ水の面ゝ照月ゝゝ秋の
ゝゝゝゝ順拾　中祓川。近江の名所ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

民部卿家百首より

みそぎせしうなねさきに移田河夕はきごろれて云ぞ明ゆく

文政みどく明屋すれ有相をとゝみく。文とわりむ仏を入えらび

みそぎだゆ上つけをう屋衣をうされとく物をうくてうく（法会の古歌ト）袖

中物寒せそ夕はを鳥とにぶくうとを也世中さびき附。四

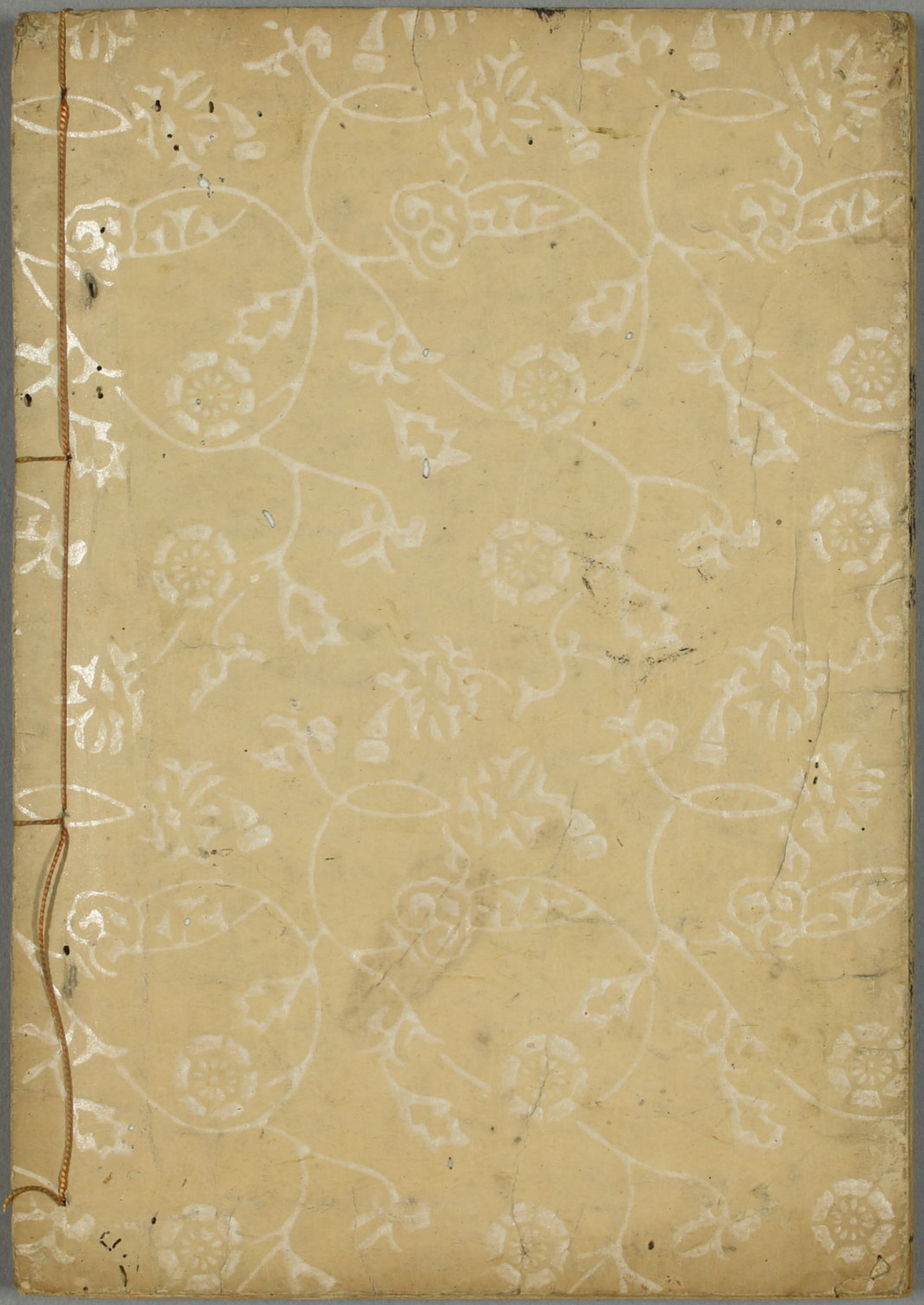
境乃紅とて。ゆかけのせらぶたまふよ。ふは鳥よ。本綿を分く。

四方の関よいうてまうる也。（僻案抄云。四境東逢坂関。西山崎

関。南羅幡関。北松崎。）文で明りとにぶてゆくを門ち。

鶏乃明てかぐらく衣の明りぶじう衣乃体といいて文れてう

来をおしむ仏とふくろう。風俗通曰。俗説雞鳴（テテ）将（ムトスル）旦（アケ）為（ニ）人起（ル）

居。門亦昏閉（ヒラケ）晨開（ヒラク）扞（フセキ）難（ナニラ）守固（ニ）禮貴（ブ）報（ハ）功。故門戸用

雞也